

ウサギが求める女性たち : John Updikeの「ウサギ4部作」における母子関係および女性の役割

著者	柏原 和子
雑誌名	研究論集
巻	85
ページ	55-65
発行年	2007-03
URL	http://doi.org/10.18956/00006231

ウサギが求める女性たち

——John Updike の「ウサギ4部作」における母子関係および女性の役割——¹⁾

柏原和子

要旨

John Updike の代表作である「ウサギ4部作」の主人公ウサギ (Harry Angstrom) の母子関係を基に彼を取り巻く女性たちとの関係を分析し、女性たちがウサギの人生の中で果たす役割を考察する。ウサギは抑圧的な母と強い絆で結ばれており精神的にかなりの影響も受けてはいるが依存関係はない。彼には、社会の抑圧からの自由を求めて優越感を得るために、支配できる愚かな女性を求め、知的な女性を好まないという傾向は見られるが、彼の女性関係を分析すると、長期間にわたって関係を続ける女性は、彼の自己探索を理解してくれる女性であり、具体的には Ruth と Thelma がこれに当たる。彼女たちはウサギの生き方を理解し、存在を肯定することで、彼の自己探索の旅に加担している。これがウサギの人生の中で女性たちが果たす役割である。

キーワード：John Updike、ウサギ4部作、女性の役割、母子関係

I. はじめに

John Updike の女性の描き方については、「女性を等身大に描いていない」として特にフェミニスト批評家たちからしばしば批判されてきた。たとえば Suzanne H. Uphaus は “Generally, Updike’s women do not have that spiritual need that his male characters express in their mythical beliefs” (Uphaus 49) と述べ、Updike の作品の重要な要素である生きる意味の探索といった精神的活動の担い手として女性が描かれていないことを指摘しているし、Mary Allen にいたっては次のように言い切ってさえている。

[Updike] consistently reasserts the worn dichotomy that a woman is sexual and stupid (human) or that she is frigid and intelligent (inhuman). Only the woman as a comfortable blank is to be desired and accepted by individual men and by society. Women who do not fit this standard are not really human and must be rubbed out of the world. (Allen 95)

たしかに大部分の作品で女性は男性主人公の脇役にすぎず、彼女たちの内面の成長が描かれる

こともほとんどない。そして Allen の言うように男性主人公たちが好むのはセクシーで愚かな女性であるというのも多くの作品に当てはまる傾向である。しかし脇役であってもそれぞれの女性たちは個性を持った人間として描き分けられており、登場人物の男性が好まない（と Allen が主張する）知的なタイプの女性たちも含めて、女性の登場人物たちは、さまざまな形で男性主人公に影響を与えているのも事実である。

本論では Updike の代表作「ウサギ4部作」を取り上げ、主人公ウサギこと Harry Angstrom と彼の母親との関係を基に、彼を取り巻く女性たちとの関係を分析し、ウサギが女性に求めるもの、女性たちがウサギの人生の中で果たす役割を考察する。

II. ウサギと母の関係

「ウサギ4部作」における主人公の母子関係についての批評家の意見はほぼ一致する。Paula R. Buck は“*The Mother Load: A Look at Rabbit's Oedipus Complex*”の中でウサギの母子関係を論じ、彼の母 Mary Angstrom は愛情と人間関係に飢え、息子しか頼るものがないとし、息子に母を恐れる気持ちを教え込むので、ウサギは母の暖かさと同時に恐さも覚えるのだと主張する (Buck 154)。Mary O'Connell はウサギの男性性がどのように形成されたかを分析する中で、母は家族の中でウサギを特別に可愛がり、特権的な扱いをする代わりに忠誠を求めるのだと言う (O'Connell 43-45)。前述の Allen は、Updike の作品の中では、力のある母親が男性主人公を操作し、彼の女性の好みに多大な影響を与え、さらに、そのような母親の存在が主人公に、従順な女性、自分が支配できる女性を求めさせると論じている (Allen 69)。

しっかり者で強い母と無力で気の弱い父の組み合わせは作者自身の生い立ちを反映してか、Updike の作品中に頻りに登場する。「ウサギ4部作」の主人公ウサギに関してもこれは例外ではない。*Rabbit, Run* に登場するウサギの母親 Mary Angstrom は背の高い、大柄な女性で家庭の中では一家を支配する強い母として描かれる。ウサギが家出した後、両親の意見を聞くために Springer 家の所属教会の司祭である Eccles が訪ねてくるが、この初対面の Eccles 司祭の前で両親は口論し、Mary は夫を言い負かしてしまう。またウサギが回想する子供のころのエピソードの中にも Mary の性格を端的に表すものが登場する。隣に住むメソジストの老人が両家の間の芝生を自分の側半分しか刈らないことに腹を立てた Mary は、夫にも息子にもそこを刈らせようとしない。半分側だけぼうぼうに伸びた芝生を見た市の職員が条例違反だから刈り取るようにと言いに来るが、母はこれは花壇だと言って刈るのを拒否する。困った父はある日、母が買い物に出かけているうちにこっそりこれを刈り取ってしまう。ウサギは母が帰ったら恐ろしい喧嘩が始まることを心配するが、父はとうとう隣のメソジストが折れて刈り取ったと母に嘘をつき、その場を丸く治める。これは母が頑固で自説を曲げない人物であることを良く表

すエピソードである。

また Mary は、嫁の Janice が気に入らないばかりに幼い孫の Nelson にもつらく当たるといった残酷さを持ち合わせてもいる。Janice がお産で入院中に、ウサギは Nelson を連れて実家を訪れる。母はほとんど Nelson を無視し、おもちゃを与えたり、抱きしめたりすることもなく、冷ややかに接する。台所でレモンを転がして遊んでいる Nelson にウサギの父が “You going to be a ballplayer like your Dad?”²⁾ と愛想良く話しかけたのに対し、母は即座に “He can't, Earl. [...] He has those little Springer hands” (196) と Janice の実家 Springer 家の悪口を交えた無情な言葉をはさむのである。

そのような母をウサギは大人になった今なお恐れ、母が自分に対して絶大な力を持っていることを感じている。ウサギの実家に預けた子供を迎えに行くようにと Janice に頼まれ、出かけようとする時、ウサギは実家に着いたときの母の様子を想像する。

But it will take longer this way, what with his own mother talking slyly and roundabout about how incompetent Janice is. He hated it when his mother went on like that; maybe she did it just to kid him, but he couldn't take her lightly, she was somehow too powerful, at least with him. (15)

また高校時代のバスケットボールのコーチだった Marty Tothero のことを回想する場面でも母親と彼とを比較して次のように考えている。

His old basketball coach, Marty Tothero, who before scandal had ousted him from the high school had a certain grip on local affairs, lived in this building supposedly and still, they said, manipulated. Rabbit dislikes manipulation but he had liked Tothero. Next to his mother Tothero had had the most *force*. (17)

ウサギを一流のバスケットボール選手へと導いてくれた Tothero も母の影響力には敵わなかったのである。

Rabbit, Run では、ウサギの見る夢の中にも母との関係が示唆されている。Ruth と知り合って一夜を共にした時にウサギが見る夢の中に母親が出てくる。夢の中で女の子が冷蔵庫のドアを開けたと言って母が叱っている。(この女の子は最初、妹の Mim なのだが途中から妻の Janice に変わる。) 母が同じ小言を何度も繰り返す言うのをウサギは横で聞いているが、血を流しているのは自分自身だと感じている。小言を言われていたのは女の子の方なのにウサギは自分が叱られているように感じているのである。この夢はウサギの潜在意識下での母に対する疚しさの現れであろう。母の気に入らない Janice と結婚したこと、その Janice の許を飛び出したこと、妻以外の女性の家に外泊したことなどに罪悪感があり、その疚しさをウサギは妻の Janice ではなく、母親に対して感じている。ウサギは26歳の今でも母を恐れているのである。

母を恐れるばかりでなく、ウサギは母から注がれる愛情を自覚している。 *Rabbit Redux* で

職場に電話がかかってきた時、パーキンソン病に罹った母親が具合が悪くなって電話してきたのかもしれないとの思いがふと過ぎり、ウサギは次のように考える。“Or his mother had taken a turn for the worse and with her last heartbeats had dialled this number. He is not surprised she would want to speak to him instead of his father, he has never doubted she loves him most” (398). また Janice が家出した後、さまざまなるわさを聞かされて心配している母親に、ウサギ自身が会いに来て話をしてほしいと言う父の言葉を聞きながら、“I’ll try to get over. I ought to talk to her” と言い、その後で “He knows that in all this rolling-on world his mother is the only person who *knows* him” (409) と考えており、母だけは自分を理解してくれると信じている。子供の頃の母への誕生日プレゼントについて、“Rabbit was pretty poor at making things so he gave her himself, his trophies, his headlines. Mom had seemed satisfied: lives more than things concerned her” (343) と回想し、彼のバスケットボールでの活躍の結実を表すトロフィーや新聞の切り抜き、すなわち彼自身を贈ることで母は満足しているようだったと思い起こす。パーキンソン病を患っている65歳の母はほとんど寝たきりに近い生活を送っているが、ウサギが訪ねていくと大喜びでもてなし、TV を見ながら、妻に逃げられた息子の首を不自由な手でマッサージまでする。*Rabbit, Run* で Eccles 司祭はウサギの母が面白い見解を持っていると言う。すなわち「ウサギが家出したというのは Janice と Eccles の妄想に過ぎない。ウサギは善良すぎてそんなことはできない。」というのが母の見解だというのである。*Rabbit, Run* で赤ん坊の Becky が亡くなったとき、葬儀で会った息子に母がかける言葉 “Hassy, what have they done to you?” (250) は、まるでいじめっ子にいじめられて帰ってきた幼い我が子にかける言葉のようである。だからこそこの後、ウサギが Janice に向けて言った残酷な言葉に皆が非難の目を向けたとき、母もその一人であったことに非常なショックを受け、その場から逃げ出すことになる。裏返せばウサギは、母はいつも自分の味方であると信じており、そしてそれが裏切られたので逃げ出すしかないほどのショックを受けたのであった。

母はウサギをもっとも愛し、全面的に支持する。ウサギも母の愛は十分、感じており、母は常に自分の味方だと信じている。しかしそこにはいわゆる「マザー・コンプレックス」と呼ばれる年齢不相応な依存関係はない。³⁾ ウサギが母親に精神的に依存していないことはさまざまな場面で見取れる。*Rabbit, Run* では自分の居場所を探して走り回るウサギは、Tothero や Eccles 司祭には生き方についての助言を求めるが母親には決して求めない。また *Rabbit Redux* で自宅が放火により全焼した後、実家に戻ったウサギは母親の存在を次のように感じている。

The distortions in Mom’s face and speech, which used to distress him during his visits, quickly assimilate to the abiding reality of her presence, which has endured all these years he has been absent and which remains the same half of the sky, sealing him in — like the cellar bulkhead out back, of two heavy halves. (570)

ウサギにとって、母親は地下室の仕切りのように自分を封じ込める存在であるが、それは「空の半分」であり母の存在がウサギを完全に閉じ込めてしまうことはない。

また別の場面では、Janice のことが嫌いな母は彼女が家出して良かったと言うので、ウサギは「ネルソンはどうなるんだ？」と問いかけ、ここが母親が間違っているところであり、相変わらずウサギが結婚前、実家にいた頃の昔のままの世界しか目に入らない、時の創りだすものを忘れていて、と思う。そして暴君のような母親の愛は世界を凍らせてしまう、と考えている。

このように母の愛情は感じ、自分の味方だと信じてはいるもののウサギは母親とは精神的に距離を置いている。*Rabbit Redux* の終盤、妻も家も仕事も何もかも失ったウサギは初めて母に助言を求める。

“Where do you think I went wrong?”

“Who says. You did?”

“Mom. No house, no wife, no job. My kid hates me. My sister says I’m ridiculous.”

“You’re. Growing up.”

“Mim says I’ve never learned any rules.”

“You haven’t had to.”

“Huh. Any decent kind of world, you wouldn’t need all these rules.”

She has no ready answer for this. (590)

母がすぐには答えないのでウサギは窓の外を見て一人考える。自分がかつて宇宙の中心であると考えた時代から、長い時間が経ち、時は人間の営みにかかわらず流れてゆくことに思いを至す。“Time is our element, not a mistaken invader. How stupid, it has taken him thirty-six years to begin to believe that” (591) 生きる上での真実に気づいて母に声をかけようとするが、母は眠ってしまっている。

このように確かに母親のウサギに対する影響力は大きいですが、ウサギはすでに母親とは距離を保っており、生き方の探索をする上での依存度もきわめて低い。

Ⅲ. 知的な女性への無関心

「力のある操作する母親の存在が男性主人公に従順で支配できる女性を求めさせる」と主張する Mary Allen は、ウサギの女性関係の特徴として、ウサギの「バカな女」への好みを論じている。愚かな女性の例として Janice と Ruth を挙げ、ウサギは自分が勝利者であることを証明するために Janice や Ruth を必要とするのだと言い、彼女たちの無能さが彼の優越を確かなものにする、と言っている (Allen 85-89) 。

確かにウサギの場合、知的な女性に興味がないという傾向は明らかである。「ウサギ4部作」

の登場人物のうち、知的な女性と言えるのは Jill, Melanie, Thelma の3人である。*Rabbit Redux* に登場するコネチカット出身の Jill は、17歳の誕生日プレゼントに父親からポルシェを贈られるような家庭に育ったが、父の死後、麻薬中毒のボーイフレンドとのトラブルもあり、家出してきたヒッピー娘である。小説の中では彼女はカウンター・カルチャーの体現者として描かれ、テクノロジー支配の価値観に反逆し、物質主義、効率主義を批判するカウンター・カルチャーの思想をウサギや Nelson に講義して聞かせる場面も出てくる。ウサギは今まで自分が知らなかった新鮮な考えに触れ、Jill の説くカウンター・カルチャーの思想が自分の生き方の探索の役に立つかもしれないと思い、真剣に耳を傾ける。また彼女は上流階級の子弟が通う良い学校で教育を受けたらしく、美しい筆跡で手紙を書き、Nelson の読めない単語を教えたりもする。ウサギはこのヒッピー娘 Jill と、行きがかり上、何ヶ月間か一緒に暮らす羽目になるが最初から二人の性行為はあまり上手くいかない。Jill の場合、社会的階級がウサギよりもはるかに上であるという事実も彼の心理に大きく影響を与えているのであろうが、やがて黒人の Skeeter が家に入り込んでくるとウサギは自分と Jill の性行為よりも Skeeter と Jill の行為を見ることへと興味が移ってしまう。

Rabbit Is Rich の Melanie は Nelson のケント大学での友人で、夏休み中、アルバイトをするためにウサギの家に泊まることになる。彼女はベジタリアンでグルジェエフの神秘思想に凝っている。自分自身の主義主張をしっかりとっており、男たちの政治論にも口を挟む。カーター大統領のことが話題になり、今の時代をどう思っているか意見を求められた Melanie は次のように答える。

“I believe the things we’re running out of we can learn to do without. I don’t need electric carving knives and all that. I’m more upset about the snail darters and the whales than about iron ore and oil. [. . .] I mean [. . .] as long as there are growing things, there’s still a world with endless possibilities.” (709)

そして“oil”と言いながら、車の販売をしているウサギをじっと見つめる彼女のことをウサギは、まるで催眠術にかけようとしているように見えると感じ、腹立たしい思いを抱いている。Melanie に対するウサギの第一印象は「豪華な蛙」であり、最初からまったく女性としての魅力を感じていない。会社の同僚でウサギと同年輩の Charlie は Melanie に興味を示し、実際にデートに連れ出したりもするが、ウサギ自身は「Melanie には興奮しない」と言っており、彼が Melanie に閉口させられる理由として、“because this girl is out of this world and that makes his world feel small” (709) を挙げ、彼女に比べれば太った年寄りの Bessie (Janice の母親)の方がセクシーであるときえ感じている。Jill のカウンター・カルチャーの思想、Melanie の神秘思想など、ウサギは自分の知らない知的世界を持つ女性に興味を持っていないのである。

同じく *Rabbit Is Rich* に登場する Thelma はウサギのゴルフ仲間の妻で、小学校教師をしている。最初に Thelma が紹介される場面で “He senses intelligence in her but intelligence in women has never much interested him” (671) との表現が出てくる。Thelma は密かにウサギに好意を抱いており、パーティーなどではいつもウサギの傍にすわったりする。Janice はこれに気づいているのにウサギ自身は少しも気づいていない。彼は Thelma にまったく関心を持っていないのである。*Rabbit Is Rich* の終盤で彼女と関係を持つことになるが、これはカリブ海のリゾート地でのスワッピングというゲームの一環としての行為であり、しかもウサギはずっと情欲を感じてきた Cindy を相手を選びたかったが、Thelma が彼を選んだため、仕方なく、ベッドを共にする。

このように知的な女性はウサギの好みではなく、女性の知性というものにも彼はまったく興味がない。これは、Allen の言うように無能な女性がウサギの優越を確かなものにするため、彼は愚かな女性を好むのかも知れない。しかし、その原因が抑圧的な母親の存在にあるという点には疑問の余地が残るし、知的な女性を好まないウサギが Thelma とは10年越しの関係を続ける理由は Allen の論だけでは説明できない。

IV. ウサギが女性に求めるもの

「ウサギ4部作」において、ウサギが肉体関係を結んだのは妻の Janice を別にすると、*Rabbit, Run* で3ヶ月間、同棲する Ruth、*Rabbit Redux* の Jill と Peggy (Janiceの親友、Nelsonの友達)の母親)、*Rabbit Is Rich* の Thelma、そして *Rabbit at Rest* の Pru (Nelsonの妻)の5人である。その他、関係を結ぶには至らないがウサギが情欲を感じる相手として、*Rabbit, Run*での Lucy Eccles、*Rabbit Is Rich* での Cindy Murkett がいる。その中で、関係が一度きりで終わらず、数ヶ月から数年にわたって続いたのは、Ruth, Jill, Thelma の3人である。そのうち Jill との関係は自ら望んだものではなく、また前述したように途中からウサギは彼女に性的興味を失っていく。Ruth と Thelma はお互いの合意の上で、長期間、関係が続いた女性たちである。なぜこの二人とは、関係が続くのであろうか。特に最初、まったく興味がなかった Thelma と10年後の *Rabbit at Rest* においてもなお、不倫の関係を続けるのはなぜなのか。Ruth と Thelma、この二人の共通点を探ることによって、ウサギが女性に求めるものが見えてくる。

Rabbit, Run で Janice との結婚生活に強い閉塞感を感じたウサギは家出をし、Tothero から紹介された娼婦 Ruth と知り合う。彼女と Janice は、小柄で引き締まった体格の Janice に対し、大柄で少々太り気味の Ruth、家事の下手な Janice と料理上手な Ruth というように対照的に描かれているが、二人の最も大きな違いは Janice には理解できないウサギの精神的希求

を Ruth は理解できるということである。Ruth の気立ての良さに惹かれたものの、ウサギは最初から彼女と暮らすことを考えていたわけではない。知り合った日にホテル代を節約するために彼女のアパートに泊まることになるが、その翌朝、二人は次のような会話を交わす。

“Why do you like me?”

“Because you’re bigger than I am.”

[. . .]

“Why else do you like me?”

She looks at him. “Shall I tell you?”

“Tell me.”

“Cause you haven’t given up. In your stupid way you’re still fighting.”

He loves hearing this; pleasure spins along his nerves, making him feel immense. (80)

そしてこの後、ウサギは Ruth と一緒に暮らすことを口にするのである。ウサギは今居る場所（Janice との結婚生活）が自分の本当の居場所ではないと感じ、逃げ出したのであるが、多くの現代人がウサギと同じように自己疎外を感じているものの日々のルーティーン・ジョブに忙殺され、あきらめて時を過ごしている。それをウサギはあきらめずに何とか居場所を見つけようと頑張っている。Janice には決して分からない、このようなウサギの内面が Ruth には分かり、それを彼女が口にしたことで、ウサギは Ruth への信頼感を増し、また自分に対する自信が生まれ、彼女と一緒に暮らすことを決心し、家へ衣類を取りに帰るのである。

Thelma の場合も同様である。*Rabbit Is Rich* でカリブ海に旅行した3組の夫婦はスワッピングをすることになる。ウサギは若い Cindy を望んでいたが、ウサギを相手として選んだのは Thelma であった。がっかりしているウサギに Thelma は “Don’t be so competitive, Harry. This is meant to be a loving sharing sort of thing, you heard Webb. [. . .] I’ll tell you one thing though, Harry Angstrom. You’re my first choice.”(994) と言い、ずっとウサギのことが好きだったと告白する。ウサギは存在しているだけで価値があるのだと言い「今日の思い出に」とアナル・セックスをさせる。その後、ウサギは私生活の悩みを Thelma に打ち明け Thelma は彼に助言を与えるが、この時ウサギは自分について今まで誰にも話していないことを話す。

He dares confide to Thelma, because she has let him fuck her up the ass in proof of love, his sense of miracle at being himself, himself instead of somebody else, and his old inkling, now fading in the energy crunch, that there was something that wanted him to find it, that he was here on earth on a kind of assignment. (1001)

すなわちウサギは、Thelma のおかげで奇蹟のように自分を取り戻し、他人ではなく自分自身になったという感じがし、昔なんとなく感じてきた、何か見つけなければならないものがあり、自分はこの地上で課題のようなものを与えられていることを思い出したのである。

Rabbit Is Rich というこのシリーズ 3 作目の小説において、この場面に至るまでのウサギは前 2 作のような自己探索、意義のある生を求める生き方を忘れてしまっている。Janice の父の死後、跡を継いでスプリング・モーターズの社長になったウサギは、物質的に恵まれ、また社会の主流のって生きられる今の生活に満足し、幸福感を感じている。“For the first time since childhood Rabbit is happy, simply, to be alive.” (629) と表されるように、生まれて初めて彼は自分の居場所にいると感じている。したがってそのような状況下では、彼は別の居場所を求めることも、自分の生き方について悩むこともない。この作品で彼が行なう探求は金儲けとセックスのみである。しかしカリブ海での Thelma との会話が彼に昔の探求を思い起こさせる。自分のアイデンティティを確認するかのように、旅行から帰ってからの彼は Ruth に会いに行き、以前、ボーイフレンドと共に車を見に来た少女が自分の娘ではないかとの疑問を Ruth にぶつける。またようやく手に入れた自分の家の書斎で、新たに自分の生き方を考えようとしている。⁴⁾

Thelma はウサギが忘れていた自己探索を思い起こさせた。そして 10 年後の *Rabbit at Rest* で Thelma の家を Harry が訪ねるシーンが登場し、読者は二人の関係がこの 10 年間、続いてきたことを知る。

このように Ruth と Thelma は二人とも、ウサギの中にある、彼にしかないものを理解している。それはかけがえのないユニークな自己の存在という観念であり、それをフルに発揮できる場を求めて生きる、ウサギの自己探索の人生である。ウサギの自己探索の原点は高校時代、バスケットボールのスタープレイヤーとして活躍した経験である。自分の能力をフルに発揮し自分の存在意義を実感できた体験が彼に個の観念、ユニークな自己の存在という観念を与えたのである。また彼には自分が「宇宙の中心にいる」という意識、自分は他人とは違う優れた存在だという意識がある。これは繰り返し出てくるドライ・ラマと自分との同一視や、*Rabbit, Run* で Eccles 司祭に対して言う “Well I don’t know all this about theology, but I’ll tell you, I do feel, I guess, that somewhere behind all this [. . .] there’s something that wants me to find it” (110) という言葉に現れている。この「僕に見つけてもらいたがっている何か」はウサギ自身、明確な言葉で言い表すことはできないが、現実の社会を動かす力とは別の、この世を支配する原理であり、大多数の人が気づいていない原理の存在に気づいている自分を、彼は特別な存在であると認識している。

Ruth はウサギが自己実現できる場を求めて戦っていることを理解し、それゆえにウサギは彼女を愛した。また Thelma はウサギのユニークな自己の存在という観念を呼び覚まし、セックスと金儲けという世俗的追求に明け暮れていたウサギを、自己探索の旅に立ち返らせるきっかけを与えた。このように自分の生き方を理解し、自分の独自性を認めてくれる女性をウサギは求め、そのような女性の存在が彼に勝利者としての自信を与えてくれるのである。これは

「バカな女性」と一緒にいることで相対的に感じる勝利者意識よりもはるかに強い自信となるはずである。

V. むすび

ウサギの母は息子をもっとも愛し、常に彼を肯定してきた。ウサギ自身もそれは十分に感じ、母の愛を疑ったことはなかった。母親の影響は確かに大きい、そのことが他の女性たちとの関係を左右するほどのものではない。Janice の許を飛び出すのも母のせいではないし、赤ん坊が生まれた後、Ruth を捨てるのも母のせいではない。マザー・コンプレックスに相当するような依存関係はウサギと母の間にはない。ウサギは母親とは画然と距離を置いている。

「力のある操作する母の存在が従順な女性、支配できる女性を求めさせる」という Allen の言葉のとおり、確かに愚かな女性を好む傾向は見られるが、その原因は母親にあるのではない。むしろ O'Connell の言うように、ウサギは自分より上に居る者からの抑圧から自由になりたいと思ひ、下に居るもの（女性）を支配したいのだろう（O'Connell 65）。⁵⁾ 彼が女性を支配したいと思う原因は彼を抑圧するものすべてである。母親も含めて、会社の上司、母親の往診にやってくる横柄な主治医、金持ち、権力を持った者などがすべて彼を抑圧しているわけであり、母だけが抑圧の原因と考えるには無理がある。

支配することによって得られる優越感より強くウサギが女性に求めるのは自分の生き方を理解してくれることであり、実際に長く関係が続く Ruth と Thelma は彼の生き方を理解し、彼のユニークな自己の存在を信じてくれた。特にウサギが最初、まったく興味がなかった、知的な Thelma と10年にもわたる長期間、関係を続けることになるのは、ウサギにとって自己探索を理解してくれる女性の存在がいかに大きいかを物語っている。結果的に彼女たちはウサギの自己探索の旅に加担することになる。これがウサギの人生の中で女性たちが果たす役割なのである。ウサギの周囲の男性たちは彼が探求する人生の謎について、誰一人として何ら有効な助言を与えることができないことを考えると、ウサギの自己探索という大きなテーマに関与する女性たちの役割は非常に大きいと言わざるを得ない。

注

- 1) この論文は、2004年10月15日に高槻市立生涯学習センターで行なわれた第16回日本ソール・ペロー協会大会での研究発表「ウサギをめぐる女性たち——John Updike の『ウサギ4部作』における母子関係および女性の役割」の原稿に加筆修正を施したものである。

- 2) John Updike. *Rabbit Angstrom: A Tetralogy*. Everyman's Library, 1995, p. 196. 「ウサギ4部作」からの引用はすべてこの版による。以下、本文中にページ数のみを記す。
- 3) 「マザー・コンプレックス」は『心理学がわかる事典』によると「青年期にある男性が、年齢不相応な依存関係をその母親との間に持っており、それに対して疑問や葛藤を抱いていない状態」を指す(南 161)。過保護、過干渉で抑圧的な母と依存的な息子といった母子関係の歪みから生じてくる両者の分離不安(息子側からの)を示す一般的な用語がマザー・コンプレックスであろう。
- 4) 「ウサギ4部作」におけるウサギの自己探索については拙論「冷戦下の『アメリカ』における自己探索——アップダイクの『ウサギ4部作』」『冷戦とアメリカ文学——21世紀からの再検証』第3部、第8章、世界思想社、2001年、および「ウサギの自己実現とアメリカ社会」『自己実現で見るアメリカン・スタディーズ入門』第9章、萌書房、2003年、を参照のこと。
- 5) O'Connellは *Updike and the Patriarchal Dilemma: Masculinity in the Rabbit Novels* で「ウサギ4部作」における父権制のイデオロギーを論じているが、ここで彼女が使っている「父権制」という用語は「男性を中心に置き、女性を周辺化する」といった広い意味での使用であり、このような父権制のイデオロギーが文化のあらゆる面に浸透しており、この作品にも隠れたテキストとして描かれている、としている。

引用文献

- Allen, Mary. "John Updike's Love of 'Dull Bovine Beauty.'" Harold Bloom (ed.) *Modern Critical Views: John Updike*. New York: Chelsea, 1987. 9–13.
- Buck, Paula R. "The Mother Load: A Look at Rabbit's Oedipus Complex." Lawrence R. Broer (ed.) *Rabbit Tales: Poetry and Politics in John Updike's Rabbit Novels*. Tuscaloosa, Alabama: U. of Alabama P., 1998. 150–169.
- O'Connell, Mary. *Updike and the Patriarchal Dilemma: Masculinity in the Rabbit Novels*. Carbondale: Southern Illinois UP., 1996.
- Updike, John. *Rabbit Angstrom: A Tetralogy*. Everyman's Library, 1995.
- Uphous, Suzanne Henning. *John Updike*. New York: Frederick Ungar, 1980.
- 南博編 『心理学がわかる事典』東京：日本実業出版社、1994。

(かしはら・かずこ 外国語学部助教授)